

# ともしび

4 月 号

いのちより大切なもの

池 田 勇 諦  
(同朋大学特別任用教授)

## 一念帰命の信心

本年も報恩講に会わせていただきまして、また、こうしてみなさんとともに聴聞させていただくひとときを得ましたことを、ありがたく感謝いたすことであります。

私は今回、ご案内いただいたように、「いのちより大切なもの」と講題にあげさせてもらっていることであります。今年の五月、来たる親鸞聖人の七百五十回の御法要に向けてのテーマ発表がなされたことであります。みなさんもいろいろな印刷物等を通して、既に御承知のことと思います。「今、いのちがあなたを生きている」。私たちの日常的な感覚からは、とうてい発想できない言葉と言わなければならぬと思います。

それにつきまして、振り返りますと、一九九八年の蓮如上人の五百回の御遠忌法要、あの御法要を迎えるに当たって、やはり同じようにテーマが考えられたこととございます。そのときに言われましたことが、私は大変印象に残っていることであります。時の能邨英士総長さんが力説されていたことですが、テーマを考える場合、最小限三つの契機というものが内容とならねばならないということで、三点言われました。第一は、現代の問題。二つ目は、蓮如上人の教え。五百回の御法要の時でしたからですね。三つ目は、宗門のいのちである同朋会運動の展開。この三点が契機となつてこそ、御法要をお迎えするテーマといえるのではないかということをおっしゃったのであります。

私は、今回のテーマを承りまして、やはりそれと重なるものであろうと受け止めたことです。とすると、やはり今回のこのテーマも、現代の問題は何であるのか。それから二つ目は、申すまでもなく、親鸞聖人の教え。それから三つ目は、やはり同朋会運動の展開に触れるということ。この三点がこのテーマの契機になつていると、

私たちは受け止めねばならないということを感じたことでございます。

そうしたことを思います時に、私はこのテーマを承って最初に思ひ合わせたことは、これはみなさんもよくご承知の言葉ですけれども、星野富弘さんの詩であります。

いのちが一番大切だと思っていたころ

生きるのが苦しかった

いのちより大切なものがあると知った日

生きてるのが嬉しかった

これはかなり読まれておりますから、みなさんもよくご承知と申します。この詩に、「いのちより大切なもの」という言葉がございます。また私は、この星野さんの詩を初めて読んだ時に思い起こしましたのは、曾我量深先生が年来言っておられた言葉であります。私は直接ご講義で拝聴しましたのは、先生の晩年でありますけれども、こうおっしゃったのです。「真宗は、いのちより大切なものを明らかにする教えである」と喝破されたことが、非常に印象に残っております。この言葉は、今、「年来」と言いましたが、先生はずいぶん前からおっしゃっているのです。

その点で先生は、あちこちでそのことをお話しになっていることですから、その一つといたしまして申し加えますと、『曾我量深講義集』が何冊か出ておりますが、その第五巻目に「道宗心得」という一文がございます。この道宗というのは、例の赤尾の道宗で

あります。そこで言われておりますことは、みなさん方も道宗というお名前を聞かれますと、例の二十一カ条を想起されるだろうと思えます。「後生の一大事、いのちのあらんかぎり、ゆだんあるまじきこと」で始まる二十一カ条ですね。そのことを曾我先生はここで取り上げられまして、そして、ご自身のお感じになることを一点、披歴なさっているという内容になっております。

一体後生の一大事とは誰にあるものか、犬とか猫とかには後生はない。決して他の動物にはない。命を持つことでは犬や猫も我々と同じこと、死ぬのは嫌で逃げ出す、悲鳴をあげるが後生はない。後生のあるのは人間のみ。後生の一大事は人間のみにあるとはつきり知らねばならぬ。人間は此の世だけではない。形は此の世だけしかないようであるが後生が分らぬとこの世が分らぬ。人間にとつて此の世がどんな意味を持つかは後生という鏡に写して見て始めて分る。そこで人間には現在この世を照らす鏡を持っているがその鏡を見ることを知らぬ。

〔曾我量深講義集〕第五巻 一九九〜二〇〇頁 弥生書房

こういうかたちで説き始めていらつしやるのであります。そしてこの二十一カ条を通しての注意すべき点としまして、「二十一カ条は常に一念に帰る」とおっしゃっています。一念というのは、信の一念のございますね。『信の一念に立て』、道宗の教訓はこの一語につきると思う（同右 二〇三頁）と押さえられまして、「命より大切なものが一念帰命であることをしっかりと頂かねばなら

ぬ」(同右 二〇四頁)。このようにおっしゃって結ばれておるのであります。命より大切なもの、それは一念帰命の信心だと、こう言っておられるのです。

このお言葉に接しまして、私は改めて感ずることですけれども、「今、いのちがあなたを生きている」。この「いのち」といわれている意味が、「無量寿」のことであって、我々が考える、いわゆる心臓の鼓動に象徴される、単なる肉体的いのちを言っている言葉ではないという指摘は、まことに同感であります。しかし、このいのち、經典の言葉に返せば寿命無量でありますけれども、寿命無量といったとき、そこには必ず光明無量が離れないわけでありますね。

超世無上に撰取し

選択五劫思惟して

光明寿命の誓願を

大悲の本としたまえり

〔正像末和讃〕 真宗聖典五〇二頁

このご和讃が端的に語っておるとおり、この光寿二無量というものは切り離せないものであります。ところが私たちは、それを何か切り離して考えがちといいますか、受け止めてしまっていないだろうかと思うのです。もし光明無量と切り離して、寿命無量ということを受け止めますと、いわゆる「いのち論」になりかねないのですね。

いろいろ指摘されることですが、生命哲学だとか、あるいは「生

かされている」という、いわゆる恩寵論といましようか、そういうことに偏向してしまう、そういう一つの危なっかしさを含んでいくと、ですから、寿命無量ということが私たちにはたらきかけてくると、そのはたらきが光明無量でありますから、光寿二無量というものは切っても切り離せないものであります。そうすると、私たちにはたらきかけるといふことはどういうことか。寿命無量が光明無量として、すなわち南無阿弥陀仏となつて「能く衆生の一切の光明を破し、能く衆生の一切の志願を満てたまう」(真宗聖典一六一頁)、つまり私たちを「ただひとたびの回心」に立たしめることでしよう。そこに初めて私たちは、「生かされているから感謝だ、ありがたい」ということで完結してしまうのではなくて、そこから仏道、歩みが始まるということなのです。だから光明無量というところで、真に私たちにとって仏道が始まることをあらわしているのではないですか。その意味において、光明無量を外して寿命無量を考えますと、単なる「いのち論」に終わってしまうということになりかねない。そういう危なっかしさを私たちは引きずるのではないか。そのことを私は強く反省させられるわけです。

いのちより大切なもの、それは一念帰命の信心だと。そこに立つて初めて「今、いのちがあなたを生きている」ということが見えてくるのではないか。

そうしますと、その信心ということがらは、親鸞聖人の生涯の出发点になった吉水入室のあの告白のお言葉で言えば、

雑行を棄てて本願に帰す。(真宗聖典三九九頁)

ということですね。ならばそういう信心という出来事が、今日の私たちにとってどういう出来事であるのか。しかもそれを現代の場で確認をしなければならないのではないか。その点を強く感じるわけでございます。

### 非合理なるがゆえに信ずる

そのことで私が特に注目させられますことは、かつて坂東性純先生が「不合理なるがゆえに我信ず」の「不合理」は「非合理」の意味ですね、と言われたことが、とても印象に残っております。それだけに、この非合理ということに、私は大変こだわりたいわけでございます。申しあげるまでもなく、私たち人間が理性的存在だと言われず限り、合理性というものが尊重されねばならぬということは、あらためて言うまでもありません。ですから、それに反する不合理なることには私たちは賛成できません。従うわけにはまいりません。もちろん不合理といえどもこれは理性無視だからですね。理性を無視したことがらに私たちは追隨するわけにはいかない。これについては多くを言うまでもございませんね。

このことを、信仰ということで申しました場合に、どういうことになるかと言いますと、**驕信**、**傲信**といわれるものです。おごりたかぶる独善的な信仰などと言いますと、みなさん方は何を思われますか。難しいことを考えるのではなくて身近に申しますと、そういう信仰の人とは話し合いができないということですね。それも

そのはずです。独善的ですから、他者の言葉に耳を傾けない。もう耳をふさいでしまっている。だから、それこそ独断と偏見ということではできないわけでございますから、話し合おうとしても、話し合うことができないというのが、**驕信**というものの恐ろしさと言つてよかろうかと思えます。オウム真理教のサリン事件以降、ニューヨークの九・一一の同時多発テロ等々、そういう事件を通して、宗教は怖い、信仰は怖いというような風評が今でも何か引きずられているような状況を感じるわけですけども、まさにこの**驕信**といった場合は、切磋琢磨という、そういうものがまったく絶えてしまっておりません。だから、私たちは到底ついていけない。

ところが、だからといって、今度は合理主義になりますと、これはまさに理性至上ですね。現代という時代は、まさにこれなのでしよう。合理主義、理性至上です。つまり、いつも指摘されますとおり、近代の人間中心主義の姿、有り様でありますね。となりまして、科学によって私たちは今日、どれほどの恩恵を被っているか、それはもうはかり知れません。ところが、その科学主義なれば、理性至上の合理主義、人間中心主義。したがって、現代の人間は、その意味において、本当に**傲慢**だと指摘されますね。

**傲慢**といっても、べつに肩をいからせて威張つて歩いているわけではないのですけれども、人間中心主義ということが**傲慢**ということですね。ですから、今日のこの合理主義の具体的な姿と言えば、**能力主義**、そして**必然的に効率主義**。自然もいのちも、みなモノ化。効率の悪いものは切り捨て、使い捨て。どこまでも**理性至上**の合理主義で闊歩している。

そうしますと、先ほど信仰ということで、不合理ということを驕信と申しましたけれども、もしもこのことを同じように信仰というところで表現するとしたら、理性至上ですからこれは「軽信」でしょうね。軽い信。そうなると、軽信は何かといったら、いわゆる教養主義ですね。特に信仰と申しましても、知的関心。これも誤解していただいではならないのですけれども、動機ということから言えば、人それぞれでありますから、どんなことでもそれが一つの契機となつて道に入らせていただくということがあるわけです、その点で私は云々するわけではありません。問題は、その動機をもつて目的とするといえますか、本命を誤つてしまうところに問題があるわけですね。軽信。教養主義、知識主義ですね。知的興味、知的関心。

これは日頃ご門徒さんといろいろお話し合ひをしておりますと、きまつて出てくることですが、でも、「親鸞聖人という人も、なかなか聞いてみるとええこと言うてるんですね」「こういう話は、聞いておくと商売のうえにも大いに参考になりますね」「こういう話は、人間生活のためになりますね」等々。参考になるとか、ためになるとかおっしゃるものだから、びつくりしてしまふ。人間中心主義ということからすると、そういう受け止め方しかできない。

さらにこれいつも話題になりますね。「いや、難しいですね。わかりませんね。もつと真宗の教えをわかりやすく言ってもらわな」と困ります」と。それとても、その現代人が「わかる」と言った場合、その中身はどういうことかといったら、必ず科学的実証主義、その立場でうなずけることが「わかる」ということなのでしょ

う。ですから、親鸞聖人の教え、念仏、信心、浄土というようなことがらを聞いても、今日の科学的実証主義の頭では、到底、それはかつちりと受け止められるというわけにはまいりませんよね。だから、難しいとなるわけです。

現代人にもわかるように言えと厳しく言われますけれども、そこにはそういう大きな問題が横たわっているということがある。これはみんな理性至上ですね。人間中心主義ということでございましょう。ですから不合理なことはもちろんついて行けないけれども、だからといって合理一辺倒、合理主義ということで押し切るあり方には、私たちはそれ以上にクレームをつけずにはいられない。そういうものを強く感じるわけがあります。

ということとは、ここで一線を引かねばならぬということ。つまり不合理にもついて行けない、けれど合理主義にも無条件で従うわけにはいかない。そこにこの「非」ということなのです。「非合理」、「非」ということです。

『教行信証』の「信巻」に、「大信海釈」という、真実の信心を讃歎される釈文が出てまいります。あそこに「四不十四非」ということが出てくるわけですが、

行にあらす・善にあらす(中略) 有念にあらす・無念にあらす、尋常にあらす・臨終にあらす、多念にあらす・一念にあらす、(真宗聖典二二六頁)

と対になっていて、どちらも「あらす」と否定されるわけです。一

方だけではない。多くお念仏を唱えなければならぬのですか、多念にあらず。では、一声の念仏でいいのですか、一念にあらず。臨終に救われるのですか、臨終にあらず。それでは、平生に救われるのですか、平生にあらず。我々の理性における両極なのです。その両極をもとに非とするあり方。そこが、私たちが注目しなければならぬところなのであります。

それを思いますと、親鸞聖人の生き方といたしまして、名高い言葉があります。「僧にあらず俗にあらず」(真宗聖典三九八頁)です。これは人間の立場における両極です。その両極を切っているわけです。僧にあらずなら俗ではないか、俗にあらずと。俗でないのなら僧でないのか、僧にあらずと。ですから、これが大乘仏教の道理からいえば、これこそが中道なのでしょう。「非」の道理というものもがまさに中道なのであります。そこは、私たちがよくよく味わうべきところです。

ですから、いま、「不合理」「合理主義」、それとともに非とする。それは一体どういうことなのでしょう。理性を排除するという話なのでしょいか。理性を排除したら、元も子もございませぬ。また、私が生きていくということは、理性的存在といわれることであるかぎり、理性が排除できるなどということはもちろんない。けれど、その理性こそが至上だと頑張ればよろしいのか。それがいま、「あらず」と切られているわけです。となると、非合理とはどういうことなのだろう。これがひとつ、私の関心の焦点です。

### おお無明よ！の叫び

その点で、みなさん方とともに承りたいところなのであります。暁烏敏先生の全集に「更生の前後」というのがあります。その第三節に「誕生の喜び」という一節がございまして、そこにはお釈迦さまの降誕から成道まで、お悟りを開かれるまでの歩みが簡潔に述べられているのです。「私は長い間釈尊正覚の一念が知りたかつたが、しつかりわからなんだ。」(「暁烏敏全集」第二部 第二卷 一九二頁 香草舎)、釈尊正覚の一念、つまりお悟りそのものというところ。「最初には仏子の自覚ぢやと思つた」(同右)、仏子というのは仏の子と書いてあります。「仏子の自覚ぢやと思つた。これもまちがひではなからうが、話が遠い」(同右)。このあたりは、なかなかきっぱりおっしゃっていますね。

本年に至りて特に明瞭に、釈尊成道の一念は、無明よとの叫びであるといふ事がわかつた。無明よとは、闇黒よといふ事である。この念の開けた時、対向して凝視してゐる悪魔は悪魔ではなくて、それが自己本然の姿であるのである。故に悪魔を降服するとは、自分が悪魔になる事である。この意味で釈尊成道の一念は、己れこれ悪魔也との自覚である。

(同 一九二頁、一九三頁)

ここを読ませていただいたときは、本当に、うならされたことで

あります。先生は、この見開きが、本当に深い確信であられたことが感ぜられるのです。お釈迦さまが悟りを開かれたというのだけれども、悟りを開かれたとはどういうことなのか。それが自分には長年わからなかったと。ところが、ついに今年になってそこがはっきりした。それは何か。お無明よという、この一念、叫び、これが釈尊の正覚の一念でなかったかと、いま読み上げたところで語っていらっしゃるのです。そして、もうひとこと読んでおきますと、

こゝに於いてか、私は成道の仏陀は、十字架上のキリストと一の天地であるやうに思はれます。又親鸞が「いづれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」の自覚と一ではありますまいかと思ひます。

(同 一九三頁)

と、こういう言葉で結んでおられることでございます。

私はここを読ませていただいて知らされましたことは、お言葉のなかにも、悪魔という言葉が出ていたでしょう。「悪魔を降服するとは」と出ておりましたが、お釈迦さまの八相成道のなかで、中心になるのがお悟りを開かれること、成道ですから、その成道をもつて八相を代表して、このように読んでいくわけですけれども、その成道の直前がこの降魔の相。字のとおり、悪魔を降す、つまり降伏なのです。悪魔を降伏させるということ。

そのことが実は、お釈迦さまの八相の歩みというものを絵にされておりますね。みなさん方も、その絵図化された八相を日ごろ拝見

なさっているのではと思うのですけれども、その絵図のことを私は思い合わせたわけです。その思い合わせた個所というのは、この降魔の相のところ。お釈迦さまの成道の直前が降魔の相なのですが、この降魔こそが成道の内実だということを、この暁鳥先生のご指摘で、あらためて知らされたのであります。

けれど、それがいったいどういうことなのかということを一歩踏み込まねばならないのですが、そのことが絵図のうえで、私は次のように言っているのではないかと学ばせられたわけです。それは何かと言いますと、山を下りられたお釈迦さまが、あらためて菩提樹の下にお座りになるといふ、それが始まるわけですが、その菩提樹下に端座されたお釈迦さまに、悪魔が襲来するわけでありまして。

するとお釈迦さまは、その悪魔に対して、「悪魔たちよ、去れ」と、素早く払われるわけです。そうすると悪魔は退散いたします。ところがまたしばらくすると、また悪魔が現れてきます。するとお釈迦さまはまた同じように、「悪魔たちよ、去れ」と厳しく言い放たれますと、また悪魔たちは退散する。そういうことの繰り返しなのであります。これはいへんドラマチックとか、劇的に表現されているわけでありまして、これは何をあらわしているかという、実は、悪魔というのはお釈迦さまの内にごめく煩惱でございますね。そして、「悪魔たちよ、去れ」と、お釈迦さまが払われる、それは何かと言ったら、そこを絵図では帝釈天が現れて悪魔を追い払うというかたちになっているのです。その帝釈天というのは何かというと、実は、お釈迦さまの理性なのです。すると、お釈迦さまを悪魔から守る、ただ一つの守護神、それは帝釈天とい

う名であらわされる理性なのです。

近代倫理学の祖のカントの言葉ではありませんけれども、「夜空に輝く満天の星と、私たち人間の理性とは、人間にとつての至宝である、宝である」と言い放っておりませうけれども、人間の立場からするならば、まさにそうなのでしょね。人間にとつての至宝です。最高のというか、これより強く言えば、唯一の宝。

この理性が、人間を発展させ、進歩させ、向上させるのです。人間をして、悪を廃して善を修せしめる。人間を悪から擁護する、まもるもの、それこそが理性でありますね。だから、帝釈天と例えられるわけでございます。

それと煩惱、悪魔が現れる。お釈迦さまの内面に動く煩惱です。「おまえ、何でこんなところに物好きに座つとるんだ。お城には妻子眷属が待つておるではないか」と。そういう一つの誘惑ですよね。妄念、妄想、誘惑ですよ。ところがそういうものが突き上げてくると、帝釈天が現れて、つまりお釈迦さまの理性が鋭く、厳しく去れと。つまり、思つてはならない、こんなことを考へてはならない、いわば抑止されるわけです。すると悪魔は、煩惱は退散するわけです。

ところが、その繰り返しをしているうちに、ついに悪魔は考えたのです。我々がいかほど攻めていても、あの太子（釈迦）を陥れることはできない。そうだ。今度こそ我々一族郎党こぞって太子を襲おうではないか。衆議一決しまして、悪魔が一族郎党挙げてお釈迦さまを襲来した。すごいですよ。そしたら、いままですの悪魔を追い払つてくれた、つまりお釈迦さまを守つてくれたその帝

釈天が、ついに逃げ出したというのです。あまりにも悪魔の軍勢の勢いに、圧倒されたというか、腰が抜けんばかりに帝釈天は驚いたのです。

ところが、暁烏先生のこの無明よの叫びを、私は読ませていただいて知らされたことは、じゃあ、その帝釈天は、どこへ逃げていったのか。この問いなのです。そしたら、実は、こともあろうに、悪魔の軍勢のなかに逃げ込んだ。これでないかと思ひます。お釈迦さまを守る唯一の理性が、実は煩惱そのものでしかなかったではないか。それが、いまここに「この念の開けた時、対向して凝視してゐる悪魔は悪魔ではなくて、それが自己本然の姿であるのである。故に悪魔を降服するとは、自分が悪魔になる事である」(前出)とこう言われています。悪魔そのものに帰る、気づくということなのです。

人間を進歩、発展させる唯一の人間の守り神は、人間自身が持つ理性でないか。近代は、その理性に目覚め、その理性中心で人間の幸せを追求して、突っ走つてきたわけでしょう。それは結果として人間を真に救うことはできたのか。今日の私たちの置かれている状況をふり返りますときに、人間を幸せにする、その理性が、実は人間を留守にさせる煩惱そのものと同質でなかったか。この一点なのです。ですから、お釈迦さまのお悟りの一念というものを、おお無明よ、このひとことで表現されたわけですね。

私たちはお釈迦さまが悟りを開かれたといひますと、これまた理性で考え、それこそ理想主義的に、高嶺の花という調子でしか受け取れないわけでしょう。ところが、この教えに導かれますときに、



本当にお釈迦さまの成道の一念というものは、最も足元に立ち返らされた一念であった。

いま、そこに私を気づかせてくださったはたらき、それが私たちにとって「南無阿弥陀仏」、寿命無量を体とした光明無量のはたらきです。我々の無明の闇を破るという破闇満願という光明無量、その光明無量に始まる私たちの歩み。それは何か。本当に悪魔そのものに帰る、懺悔、痛み。その痛み・悲しみの智眼から、自己を社会を智見していく歩み、それこそ終わりなき歩みというほかないでしょう。それが始まる。

私の申しあげたかったことは、いのちより大切なものを明らかにする。このことがあいまいであつたら、「今、いのちがあなたを生きている」ということも、何か単なる「おかげさま論」に終わってしまうのではないかとということです。

そうではなく、そこから歩みが始まるということですね。歩みが始まらなかつたら仏道にならない、聞法ということにならないわけでございます。私はそのことを何よりも自問させられ、確認をさせていただきたいと願ったことでございます。

どうも充分意を尽くしませんけれども、時間もまいりましたので、終わらせていただきます。最後まで、どうもありがとうございます。

(いけだ ゆうたい)

二〇〇五年十一月二十六日

高倉会館親鸞聖人讃仰講演会抄録

## クローシャ/さけび

krośa

さけび

先日、取材のために、鹿児島へ飛んだ。あいにくの雨模様で、離陸時に機体が揺れた。着陸時に機体の揺れの予告と心配ないと機内アナウンスがあつた。数分後、機体は揺れ始めた。しかし、その予告のためか、不安を覚えることはなかった。

帰りの便に乗った。到着地の大阪は雨。当然、気流が乱れて機体は揺れると思われた。だが機内には、何の予告もなかった。そして、予想通り機体がひどく揺れ急降下をし始めた。さすがに恐怖を感じ、思わず叫びならぬ唸り声を上げた。

実は、復路の会社は、その日、会社の内紛が伝えられたあの会社だった。社内のごたごたが、末端の対応とも関わっているであろうか。たかが機内アナウンス一つかもしれない。しかし、必要なタイミングでの的確な予告の有無は、乗客に与える安心感に確実に違いを生んでいた。そして、アナウンス一つの有無に、大きな組織全体の状態が透けて見えてくる。

翻って、私自身はどうか。本山主催のあるシンポジウムで司会をした時のことだ。司会のアナウンスが何を言っているか聞き取りにくかつたとのアンケート結果を読んで血の気が引き猛省した苦い記憶がある。原因は不明だが、何より私のコメントが不親切であつたことが主因であることは間違いない。

機内アナウンスに関係なく飛行機は飛ぶだろう。だが二つの飛行機は、明らかに安心感が違った。サービス一つの有無が、決定的な違いを生むのだ。時折、東本願寺の方だからと頼み事をされることがある。果たして、充分な対応が出来てきたか心許ない。苦情の声は得てして本人には届かないものである。他山の石ではないが、時には真面目に考えてみなければならぬ。そう思えた出来事であつた。

(研究員・福島栄寿)

誰しも、何時のときか、自分はどうしてこんなところに生まれてしまったんだろうと思つたことが、一度はあるのではないでしょうか。

そんなときには食欲もなくなり、眠ることもできなくなつたり、世の中全体がどんよりとした雲に覆われたような重い気分になつてしまいます。何を見ても輝いては見えず、たくさんの人が周りにいて話していても、それが「人」だとは感じることができず「物体」としか感じる

ことができな。自分の体の痛みなどの感覚もだんだん希薄になつて、自分が生きている実感(リアリティ)を感じることができなくなつて、思わず自分の体を傷つけてしまいたい衝動に駆られたりすることもあります。そうして、生きる意味なんてあるんだろうかと、思つたりしてしまいます。

そんなときに、人から「そんなに深刻に考えないほうがいいよ」とか「自分を傷つけないで」「自分勝手にあなたのものではない」「自分勝手にそれを断つてはいけない」「後に残された人が悲しむ」とか「あなたの身体(生命)はあなたを支えていく」とかどんなに言われても、苦しみと死にたいという気分は解けることはありません。そんなことを言われたりすると、逆に「そんなこと言われなくてもわかつている」という怒りがこみあげたりもしてしまいます。

教学研究所 メッセージ

今、いのちが  
あなたを生きている

こうしたしんどさは、はつきりと感じるか感じないの差はあつても、人間である限り逃れることができないのではないのでしょうか。なぜなら、人間は自分というものを意識したときから、一切を自分の外に眺め、自分に価値があるかどうかで計るという「自意識」をこそ主体として生きる存在だからです。

何かのきっかけで、自分の人生はいつたいい何なんでしょうという思いに沈み立ち上がれなくなつたり、重い病に罹つたときに自暴自棄になつたりするのは、自分が自分を眺め、計るということがそこに起きているからです。人生と自分の存在を「計る」からこそ、色あせてしまふという、どうにも逃れられない矛盾が人間にはあります。

ところが、大悲の人と言われる仏の智慧は、すでに人間のそうした苦悩の必然性を見抜いて、一切の衆生を誰一人捨てることなく、あなたは苦しんでいますねと呼びかけてくる。その呼びかけの声は、単に「よしよし」と頭をなでてくれるものではなく、「あなたは、計る自分だからこそ、自分を追い詰めるを得ない。そうした邪見の存在以外の何ものでもない、そのことに目覚めよ」という、雷の声です。その声は「汝、無量寿に帰れ。無量寿に帰れ、無量寿を生きよ」という、大悲の心から発せられる、命を懸けた「絶対否定」の呼び声であるのです。

高倉会館 今後の予定

▼日曜講演 ▲ (開会 午前九時三十分)

四月二日「聖道と証道」

教学研究所長 小川 一乘

四月九日「願生浄土と戦争放棄」

元教学研究所長 児玉 暁洋

四月十六日「歎異抄」に聞く(第45回) 回心

本願に帰し、本願に生きる―第16条―  
大谷大学特別任用教授 小野 蓮明

四月二十三日「真宗の大綱(1)―往相回向の心行―」

大谷大学名誉教授 寺川 俊昭

四月三十日(休会)

五月七日 大谷専修学院院长 竹中 智秀

五月十四日 大谷大学名誉教授 鍵主 良敬

五月二十一日 同朋大学特別任用教授 池田 勇諦

五月二十八日 東京医療保健大学教授 菅原 伸郎

▼高倉同朋の会 ▲

四月二十七日(木) 午後六時三十分より

場所 高倉会館

講師 小川一乘(高倉会館館長・教学研究所長)

テキスト 『正信偈』

\* \* \*

お問い合わせ先

『ともしび』の内容、「高倉同朋の会」について

教学研究所 〇七五―三七―一八七五〇

『ともしび』の申し込み・支払い・発送について

東本願寺出版部 〇七五―三七―一九一八九

第二〇〇六(平成十八)年四月一日発行  
第三種郵便物認可  
編集 熊谷宗恵  
発行 真宗大谷派宗務所  
代表 熊谷宗恵

一年二〇〇円(送料代振込先 真宗大谷派宗務所財務部(ともしび) 口座番号 〇一〇―一〇一―二六〇八)